

# 多喜二が「東倶知安行」を書いたころ

倉 田 稔

## 目 次

はじめに

- 1 出版記念会（再）
- 2 伊藤整の東京商大行き
- 3 生活ぶり
- 4 ナップ
- 5 「東倶知安行」
- 6 伊藤信二
- 7 上京。大月と中村
- 9 森良玄と

補遺 小樽と映画

軍教事件3稿への補遺・訂正

多喜二しのぶ新住居跡碑

## はじめに

本稿は、小林多喜二伝の(28)である。ただし、1つの補いを第1節に置く、また拙稿「昭和初期、多喜二の文学上の営為」(『人文研究』96しゅう 1998年8月)に「シネマ」の節を書いたが、その背景を説明しておくために、最終節に補遺「小樽と映画」を挿入しておく。そして2つの補遺も置く。

### 1 出版記念会（再）

「小林多喜二の昭和時代、拓銀時代」(『人文研究』第94輯 1997年8月)で、小生は、出版祝賀会について書いたが、これについて全く違った印象＝

結論を抱いた参加者があった。山野千衛である。彼は、ナップ小樽支部を小林多喜二や伊藤信二らと支えた人である。彼は次のような思い出を書く。  
( ) 内は、引用者の補いである。

米山勝美のカル・サウングアス「人口問題研究」が訳述され、その出版記念会が小樽の某所で行はれた。昭和2年の暮ちかくであつた。彼(多喜二)はその頃、懸命にマルクスをやつてゐた。米山といふのは以前新人会のメンバーだったこともある男だが、その頃はそろそろ転落しかけてゐたのだ。小林は招待をうけたので、友人の一人(武田 暹)と連れだつて出席した。

「M(南亮三郎、以下、南とする)が来ているゾ」彼は席へ座るとその友人の袖をひつぱつて、小声で呟いた。だが嬉しそつた。南といふのは高商の教授で二三の経済学の著述のある学者であつたが、露骨な御用学者だつた。小林は勿論、我々も新婦朝者面をことごとくに振り廻してゐる南教授に対しては前々から好感をもつてゐなかつた。

南の外に高商教授が二三人、新聞記者、米山の知人等十四五人の集まりだつた。雑談の形式で時間が過ぎ、人口問題についての話が二三断片的に出た。だが次第に南が中心になつて喋り、結局「人口問題」の解説と批判の、南教授講演会の観を呈して来た。露骨な南の反マルクス説に、興奮してきた小林が「馬鹿な、馬鹿ナ」と、小声で云ひつゞけてゐた。だが小林は湛りかねたのだ。立つて、南に質問を試みたのだ。だが、その質問に南は極めてあつさり答へた。——素人には解らぬ——さういつたような語調がその中に含まれてゐた。その傲然とした南の態度に、ぐつと来た小林は、あくまでその質問に喰い下がつて、彼一流の鋭い論旨で南に迫つた。最初は軽く逃げてゐた南も、流石に、もう逃げをうつわけにはゆかなくなつた。論争が産業予備軍の一点に集中され、南も愈々本腰になつて来た。小林ははじめから真剣だ、あくまで粉碎しなければ止まぬ勢で攻撃の手をゆるめない。激論また激論、誰も、どう仕様もなかつた。ただ茫然と兩人の論争を見守つてゐるだけだ。

南教授は次第に小林に押されて行つた。椅子を立つたり、座つたり、額に

ハンケチを当てたり、ひどく忙はしい動作を繰り返へしながら南はたちたちの体で、それでも小林に応戦してみた、約一時間以上も続いて、もう誰の眼にも、南教授の敗北は明かだつた。徹底的に、根こそぎにしなければ止まない小林の攻撃が勝つたのだ。それは同時にマルクシズムの勝利であつた。出版記念会は二人の討論会になつて終わった。

この会こそ、おそらく小林が、公開の席で反動的な理論と闘つて、それを粉碎した最初の経験であつたろう。

友人と連れだつて、会場を出ると、小林は急に声をあげて泣き出した。雪解けの泥濘の中に、彼は感激のあまり我を忘れたのだ<sup>(1)</sup>。

この結論は、前出の武田暉の回想と全く違っている。武田は、多喜二は論争に負けた、というものであり、武田の方が正しいのであろう。

山野はまた書く。

小林は類のない議論好きだ。だが無類の負けず嫌いでもあつた。「議論の途中で、これは自分の負けだなあ、と思ふ。だが、その時はモウ遅いのだ。どうにも、動きがとれないのだ。滅茶苦茶に相手をやつつけて行くより仕方がない。抽象的な議論ならまだいい。しかし証拠がハツキリ目の前に突きつけられた場合、例へば、数学上のこと、語学上のことなどでも、どうも相手に負けとはいへず、なおかつ、相手に喰つてかかるのだ」と彼が正直に告白したことがあつた。以前の彼には確かに、独断家的なタイプがあつた。不屈の異常な頑張り家であつたことは間違いないが、だが、彼は次第に自己の性格の裡から、独断家的部分をふるひ落して行つた。不断の努力を組織的な訓練を通して、そうなることが出来たのだ。たゞ何物にも屈しない頑張りの部分だけが死ぬまで彼から離れずに、大きく成長して行つた<sup>(2)</sup>。

## 2 伊藤整の東京商大行き

伊藤整は、小樽を去って、文学のために、上京した<sup>(3)</sup>。そして東京高商に入った。彼は、大塚金之助<sup>(4)</sup>の授業へ少し出たらしい。多喜二の師であつた大熊

信行と、その兄弟子であった大塚金之助との関連はどうか。

大塚金之助は<sup>(5)</sup>、1892年(明治25年)生まれである。1914年(大正3年)4月、東京高商専攻部に入学し、福田ゼミに入った。1916年(大正5年)3月に卒業した。4月に同校の講師嘱託になる。1917年4月に講師、11月に教授になった。1919年4月に海外留学した。1924年1月に帰国している。

大熊信行は、1893年生まれである。大塚より1歳若い。1912年(明治45年)東京高商予科に入学した。1916年3月、本科を卒業した。従って、終わりの2年がちょうど大塚と重なっている。ただし、大塚は専攻部で、大熊が本科という違いがある。それにまた大熊は、3年学校を離れてから、1919年4月に、専攻部に入学し、福田ゼミに入った。ちょうど大塚が海外留学をする際である。大熊は1921年に卒業している。大熊と大塚金之助とはしかし知り合っていたとされる。

整は書く。「そういう時代の変わり目は、単純でなくて捕らえにくかった。マルキシズムへの関心は、青年の間ではむしろ常識化されたほど共通のものであった。第一次大戦後の日本は不況に襲われ労働主義と小作主義が盛んになり『文芸戦線』『戦旗』『ナツプ』という政治的な新しい文芸の動きが目立った。商科大学では大塚金之助教授の経済学原論が、その師福田徳三博士の商業主義的自由主義な「経済学講話」に代表される原論のあとを受け、その明らかに進歩的な論調の点で人気があり、時々出席してみると、教室にあふれるほど学生が出ており、時間の終りには学生がペンをおいて、一斉に拍手するのであった。」<sup>(6)</sup>

### 3 生活ぶり

このころの小林多喜二の風采について、友人たちが思い出を残している。(現代字でそれを記す。)

多喜二は小樽で、よく、着流しで夜おそく街を一人歩きしていた(高崎→飯坂)。ステッキを振りながら口笛吹いて坂をのぼってくる姿が、皆の思い出にある。そして、帯を、尻より下までたらしめて、であった。だが、構え方は

無雑作でも、結構洒落っ気もあった。一番良い布地、上等な靴を身につけた。でも手入れは悪かった。ワイシャツの襟のところがすりきれてても平気だった。女給に笑われても無頓着であった。1928年に多喜二はオーバーを作った。山野は書く。(現代字で表す)

彼の勤めていた銀行で、小林は「新人」というニック・ネームで呼ばれていた。また小林の姓が、彼の外に三人もいるので、彼を指すときはとくに一つの暗号をお互いの間で扱った。左腕で鞆をかかえるポーズがそれだ。彼の鞆はそれほど有名なものだった。原稿の下書き、ノート、本、雑誌その他のものが何時だって鞆の口からハミ出るほどぎっしり詰まっていなかった。彼は酔っぱらって友人を置き忘れるようなことがあっても、その鞆だけは置き忘れるような男ではなかった。

仕事第一が彼の裡に根強く喰いこんでいる。一にも仕事、二にも仕事、いつどんな場合でも彼は露骨にそれを出した。雑談をしても隙をみて本を読む。冗談しながら、議論しながら原稿を書く。電話で顧客と対応しながらでも、メモに下書きを記している小林だ。この点、書齋に閉じ籠って独り静かに思索しなければ書けない人間ではなかった。彼の読書と執筆は殆んど銀行でやられた。彼の「一九二八年三月十五日」「蟹工船」「不在地主」等は悉くそうだ。だが行務の方でも小林は同僚を擢(ぬ)きんでていた。(俺がもし、銀行員で身を立てる積りなら……)と同僚の仕事振りの、のろま加減と不勉強を軽蔑していた。何時だったか、銀行の一日をどんな工合いに利用しているかについて、「先ず、朝出勤する。便所へ新聞を持ち込む、十分か十五分、皆んなが雑談をやっている内に、一通り目を通す」。こんな口調で、彼の一日の時間表を説明したことがあった。驚くほど綿密に、科学的にくみだてられたものだった。一分の隙もない、というやり方だ。彼は自分の職場を書齋にすることが出来た人間だ。

彼には月給とり根性というものが無い。だから、よくある勢力争いの渦中には投じない。しかも仕事には精励だ。同僚のうけの悪い筈はない。

小林はよく冗談をいう。そしてよく女にからかった。だが単なるからかい

には終らない。彼は始めから相手の性格を探り出すための手段としてやるのだ。それをつきとめる迄は止めない。だからしつこい。それがいつの間にか、作品の中で肉付けされ、リアルに生かされている。彼は全てを仕事という角度から判断し、摂取する男だ。この点、彼は天才的なものをもってた。彼は遊ぶために遊ぶのでなしに、仕事のために遊ぶのだ。それで何時も、せかせかと忙しそうに見える彼だ。

小林は銀行を退けると、真直ぐに我々のところへやって来たものだ。そこで、文学のことや、政治について論じた。彼が十二時前に、帰宅することはまあなかった。彼の家は市街の中央から小一里も距ったところにあったから、彼は車で通勤していた。だが、いつも彼の帰る時刻にはもう車は無かった。時間にすれば三十分許りの道程を彼は歩いて帰った。この時間がその頃の彼に許された、たった一人の時間だった。「こうした時間をもてることは非常に嬉しい」と彼が語ったことがあった<sup>(7)</sup>。

写真を通しての小林の顔や、高商出の銀行員だったことから、多くの人は、いわゆるスマートな容姿を想像する、だがまったく逆だ。彼ほど服装に無頓着だった男は少ない。ズボンの股は必ず穴があいている。ソフト・カラーは汚れると裏返しにして使ふ。ワイシャツの襟元は穴だらけになり、地肌が見える。だが彼は平気だ。Mボタンがすっかりはずれているなどもよくあった。床屋へ二三ヶ月行かない位ならまだいい方だ。銭湯へも大体年に数えるだけしか行かない。たまに行けば料金を倍にして二時間以上も浸っている。だから彼と風呂につき合うことは我々友人にとつて、少なからぬ苦痛だった。だが、それでいて、彼の皮膚は目立つほど汚れていないし、頭にはフケが溜らない。

雨の中を傘もなく、せんべいのような下駄をはいて、作家同盟の仕事に、走り廻っていた彼の姿は、我々の間には、あまりにも知れ渡っている。

……活動を続けるようになってから、彼は身ナリについて、細いところまで気を配るようになったらしい。だが、シャツポだけは依然として前からの舊いのを離さなかった。「今流行りの切りツバというやつを、俺は被る気がし

ない」と、始終舊型で通していたのは、彼らしい潔癖さだ。彼の所かまはずやる立ち小便は、昔から友人間で有名だった。その「小林の立小便」のクセを彼は注意深く抑えつけた。がその代り飲食店などを見付けて、手あたり次第飛び込む方法を用いた。「時間が余った時など、変にブラブラしているのは危ない。俺はこの方法で、二十分でも三十分でも頑張っている。一番安全なやり方だ」と、便所の利用(!)法を発見して推奨していた、小林であった。こんなことは一つの例に過ぎないが、昔からの特有の性癖を、彼は出来るだけ抑えつけるように、相当苦心もしたようだ。特に人目を惹くような彼のアラは完全なまでに失くることが出来た。否、そうしなければいけなかったからだ<sup>(8)</sup>。

#### 4 ナップ

大震災後、プロレタリア文化運動の人々は、大正13(1924)年6月、『文芸戦線』を創刊した。かれらは、大正14(1925)年12月6日、「日本プロレタリア文芸連盟」を結成した。大正15年(1926)11月14日、その第2回大会で、アナキズム系作家を排除して、「日本プロレタリア芸術連盟」ができた。

ここで、当時の福本理論の影響を受けた、鹿地亘(本名、瀬口貢)、中野重治<sup>(9)</sup>、久坂栄二郎、谷一、佐野碩、らの福本イズム派がいた。これに、藤森成吉<sup>(10)</sup>、青野季吉<sup>(11)</sup>、林房雄(本名、後藤寿夫)<sup>(12)</sup>、村山知義<sup>(13)</sup>、葉山嘉樹<sup>(14)</sup>、山田清三郎<sup>(15)</sup>、蔵原惟人<sup>(16)</sup>、小川信一(本名、大河内信威)、田口憲一らが、文学理論上で対立し、昭和2(1927)年6月19日、後者はプロ芸から脱退し、「労農芸術家連盟」を組織し、『文芸戦線』を機関誌とした。プロ芸に残った者は、『プロレタリア芸術』を創刊した。

ところがこの「労農芸術家連盟」が、昭和2(1927)年11月12日に分裂することになった。青野季吉、前田河広一郎<sup>(17)</sup>、金子洋文<sup>(18)</sup>、葉山嘉樹、黒島伝治<sup>(19)</sup>、平林たい子<sup>(20)</sup>などの山川イズム派と、藤森成吉、林房雄、佐々木孝丸、村山知義、蔵原惟人、小川信一、川口浩、山田清三郎などの反山川イズム派が対立した。後者が労芸を脱退し、「前衛芸術家同盟」を結成し、機関

誌『前衛』を創刊した。

こうしてプロ芸、労芸、前芸とに分裂した。だが昭和3（1928）年3月13日、プロ芸と前芸とが合同し、「日本左翼文芸家総連合」が結成された。これは2日後の三・一五事件で消滅したが、すぐ3月25日に、このプロ芸と前芸は、他の小団体とともに、「全日本無産者芸術連盟」を結成した。略称ナップである。5月には、機関誌『戦旗』を創刊した。この団体は昭和3（1928）年12月25日に再組織され、「全日本無産者芸術団体協議会」となった。略称はまたナップである。

三・一五事件は、作家たちには大きな弾圧はなかった。しかしこの重大事件にショックを受けた作家たちは、統一戦線の必要を痛感した。そして三月二六日にナップ（全日本無産者芸術聯盟）が結成された。機関誌として『戦旗』が発行された。

小樽支部も準備会が結成された。場所は小樽市東雲町の高崎徹の家だった。高崎は当時、小樽新聞社にいて、小樽高商のロシア語担当で、蔵原惟人の友人だった。みな昼間は仕事をもっているので、夜集まった。別に会議の形式にはとられず、ストーブを囲んで座談式にやった。

その時出席したのは、高崎徹、高橋運蔵、多喜二、伊藤信二、風間六三で、他に高崎の妻が赤ん坊を抱いて傍聴した。

先ず、前芸とプロ芸が合同した喜びを分かち合った。会合では、多喜二が書記を引き受け、伊藤が文芸部、風間が美術部を受け持つことになった。とにかくこの三人がいちおう表面つまり合法面に出ることにした。同席した他の人は伏せておくことにした。

席上、小林の動議で、ナップ本部の大会へ祝電を打つことになった。「タイカイハワレラノイチリヅカダ」と小林が呼び上げ、電文を二度繰り返して読み、皆の承認を求めた。

警察には特別に届出はしないことにした。小樽での刊行物はすぐ出さないのだし、政治団体でなく文芸愛好家の集まりということにしておいた。

それが終って、その時進行していた小樽警察での重大事件の話に向かって



いった。小樽合同労働組合の人々や、浜の労働者、知識人などが引っ張られて、取り調べられたことである。内務省の役人が来ていると、云った。伊藤は、何日かの拘留検束から出てきたばかりなので、すこぶる興奮していた。「また近日中に引っ張られるかも知れぬ」と前置きして、「製缶会社の仕事を休むと賃金がもらえぬので、生活に差し支える」と言って、いちおう釈放されたと語った。また事件の内容はまだ分からないが、組合の武内清をはじめ二、三人がまだ捕まっていないし、警察はやっきとなって捜しており、かつてない激烈さと殺気がみなぎっている、といった。

伊藤は、3月15日に寝込みを襲われた。それを知った風間は、小樽合同の事務所に行き、組合の人々が根こそぎやられたのを知った。そこを張り番していた巡査には、印刷屋のカケ取りだといって言い逃れ、難をのがれた。だが一八日に家宅捜査を受けた。

会合では、この重大事件を見守ろうということになった。

それから小樽ナップ員の個々の交渉はあったが、数日間、多喜二が上京し、その後、五月末に高崎の家でナップの会合が再びもたれた。

小林は、蔵原と会ったことを第一義として報告した。伊藤も、長い間の再拘留のあと、警察から出てきていた。

会では、伊藤の話が一番スペースを占めた。伊藤は、身振り手振りで自分の喋ることに酔うように、組合の人々が警察に過酷な取調べをされた有様、拷問の様子を、垣間見た状況を話した。一同、伊藤の文学的表現を感嘆をもって聞いた。それは迫真力のある話だった。

小林は、随分しつこいくらいに事実を根掘り葉堀り聞きただした。

多喜二は、風間に話したが、警察に留置されていた親しい間柄の寺田行雄や古川友一が釈放されたと聞いて、早速かれらの自宅を訪ね、共産党事件の検挙取調べの様態を聞いた<sup>(21)</sup>。

多喜二は、小樽ナップ支部を作り、自分で『戦旗』の配布を受け持った。ナップ加盟後、特高刑事が銀行へ監視に来た。『戦旗』の編集長は、名編集長といわれた佐藤武夫であった。『戦旗』創刊号は、たちまち発売禁止をくった。

八月号に、中野重治「春さきの風」が載った。それは三・一五事件に取材した最初の小説であった。

ナップは、3月26日に結成された。その後、ナップの内部で専門別に組織化されることになった。これまでの総合的な単一組織であることをやめて、それぞれ専門別に組織をつくる。例えば、文学、美術、演劇と、分ける。その上に統一組織として全日本無産者芸術団体協議会ナップとする。というのであった。

1928（昭和3）年12月25日に大会が行われ、以上のように決まり、文学の方ではプロレタリア作家同盟が結成されることになった。作家同盟の創立大会は、1929年2月10日であった。その綱領はつぎのようである。

「プロレタリアートの解放のための階級文学の確立を期す。

我らの運動に加わる一切の政治的抑圧撤廃のために闘う。」

創立大会は次の役員を選んだ。中央委員長 藤森成吉、書記長 猪野省三、中央委員 林房雄 山田清三郎 中野重治 鹿地亘 蔵原惟人 江馬修 壺井繁治 江口渙（以上が常任）そして小林多喜二 久坂栄二郎。多喜二が中央委員となったのは、作品「一九二八・三・一五」によるものであろう。

## 5 「東俱知安行」

多喜二年譜によればこうである。1928年2月、第1回普選実施。労働農民等から立候補した日本共産党員の山本懸蔵を応援し、東俱知安方面の演説隊に加わる。9月5日、「東俱知安行」完成、と。

小説「一九二八年三月十五日」が完成したのが、8月17日だから、その後、半月して「東俱知安行」ができあがった。だからこれは「三・一五」と『蟹工船』の間に位置している。しかし多喜二は、「三・一五」を自分の第1作、『蟹工船』を第2作と呼んでいる。

「東俱知安行」<sup>(22)</sup>は、1930年の『改造』12月号に出た。彼はこれを、1928年秋の文芸春秋社の『創作月刊』に送ったまま没稿になっていた。多喜二のノート稿から斉藤次郎が新たに清書して、『改造』に発表したのだった。

この小説は、彼の東京時代に多喜二が投獄されていた時に出た。彼は不満だが発行した。収入を手にしたかったからである。その後、『東俱知安行』の発刊の件で、島田あて手紙で多喜二は、「あんな幽霊を今更出したくない。」と言う。

高山亮二は、「小林多喜二『東俱知安行』の位相について」（『北方文芸』1975年1月）で、彼の経験そのままの部分と虚構部分とを明らかにした。

第1回総選挙で、労働農民党から山本懸蔵が立候補した。多喜二は選挙運動を手伝った。小説「東俱知安行」は、その小説化である。労働農民党は、第1区は小樽中心で、候補者・山懸は有名だが、持込み候補だった。小説では、島田正策となっており、これは多喜二の親友の島田さんの名である。島田氏は、「無断で自分の名前を使われてしまった」と、語る<sup>(23)</sup>。

小説でいうY港は、小樽港である。O市は小樽市である。小説は小樽の選挙事務所から始まる。

多喜二は書く、「島田正策が東京からの「輸入」候補であるために、他の候補者達は「投票するなら、地元候補へ」そう印刷したビラを撒いて、民衆の単純な愛郷心を歪めようとした。」<sup>(24)</sup>しかしこの考えは若い。東京からの輸入候補では滅多には勝てない。常識的に言えば、共産党、労農党の戦術の誤りであろう。ただし小樽地方では地方候補者がいなかったかもしれない。なお共産党は選挙で勝つつもりはなかった。

多喜二は続いて書く、「それに初めての「プロレタリア」候補であるために、[他の候補者は]滑稽なほどおじけついて、彼らは「島正」を共産党であり、ロシアの手先になっている「国賊」であると、云いふらしていた。ことに、こんな考え方は日本のような国では、一般民衆がひょいと抱き易い考えであり、しかも一旦抱いたら最後 染職の掌のように、棺桶の中までも持って行かなければならない程しみこんでしまうのだった。」この「考え」の形容はうまいものである。しかしロシアの手先、つまり当時の日本共産党はコミンテルン支部であるから、そういわれると、どうにも仕方なかったであろう。

多喜二は、ビラ貼り、ガリ切りをやった。家族もちで、選挙の表面に出な

かったので、彼にはうしろめたさがあった。

多喜二は、二月、東倶知安（現 京極町<sup>(25)</sup>）方面に、応援演説隊に加わり、行った。応援演説は、真狩から京極にかけて行なった。馬そりで行ったというのはフィクションで、事実は歩いて行った<sup>(26)</sup>。東倶知安では多喜二は選挙演説をやった。

小説で出て来る 70 歳の老人の水沢は、幸徳秋水の弟子となっている。そして、娘が売春している。それにたいして、主人公が感動している。これは態度としては本当は間違いである、と小笠原氏は言う。つまり、そういう娘の収入をあてにするのは間違いという意味である。ただし、この小説で、主人公が老人に感動しているとは、私には思えない。

この小説には、小樽言葉がある。

小説の主人公は、「私」であるが、小林多喜二本人である。鈴木は鈴木源重であり、彼も家族持ちだった。一緒に行ったのは、「吉川」であり、銀行員となっている。

平野 謙は、『東倶知安行』について言う。『東倶知安行』は、「ナイーブだけれども、小林多喜二の、いわゆるイデオロギーに制約されていない文学的な資質が流露しているところがある。そういう点が『不在地主』『一九二八年三月十五日』にくらべて『防雪林』や『東倶知安行』の大切な点ですね。それが『不在地主』から『工場細胞』『オルグ』とすすんでゆくところに、プロレタリア文学全体の発展があった、と自他ともに信じて疑わなかった点に、小林多喜二の文学的不幸があったような気がしますね。」<sup>(27)</sup>有名なブルジョア的批判である。しかしこれは多喜二文学を全否定するようなものであって、批評としては、高所に立ったものではない。

## 6 伊藤信二

伊藤信二は、明治 40（1907）年生まれ、小樽市稲穂町の薬店、大正堂の息子であり、稲穂小学校出身で、裕福とまではいなくても、生活に心配はなかった。北海道庁立小樽中学校に入学した。中学 2 年の時、薬種商を営んで

いた父が、投機に手を出して大失敗し、蒸発し、破産状態になり、店を閉じた。母はタイ、兄は寛である。母が発狂状態になり、煮え湯をかぶって、顔が見るに耐えなくなった。

一家の生計を維持するため、兄も働いたが、信二も中学を2年でやめ、北海製缶に働きに出ることになった。

中学をやめたころ、彼には文学的才能があったので、風間六三や稲垣小五郎(プロの漫画家、目黒生(うまる))らと一緒に、芸術一般について語り合った。そしてその仲間で、回覧雑誌『赤ゐ』を作った。誌名の発案は稲垣で、同人には他に、森田徳蔵、横山巖、松本久喜、客員として中村善策がいた。3号か4号まで出した。絵画論や文学論、同人批評などいろいろやった。その後、稲垣は、東京の川端画学校へ行き、プロレタリア美術運動に入った。

伊藤は、北海製缶で働きながら、作品を書き、製缶会社発行の『キャン倶楽部』に毎号発表し、将来は文筆で家計を立てたいと思っていた。

三・一五事件の直前、山本懸蔵の選挙応援で、前芸の多喜二、プロ芸の伊藤、そして風間が、小樽合同労働組合で、正式に一緒に仕事をするようになった。

伊藤は、職場の関係からも、合同労組の仕事を一部手伝った。そのため、三・一五で、起訴はされなかったが、検挙され、小樽の武内清、渡辺利右衛門らの拷問の状況をつぶさに知った。これらの見聞が、古川友一や寺田行雄らの資料とともに、多喜二の『一九二八・三・一五』の素材として用いられている。

三・一五事件後、ナップの小樽支部が生まれた。そのころから、伊藤は、腺病質であったが、結核の初期症状を示した。病身なので無理な芸術活動は強いなかった。

翌年の四・一六事件では、彼はナップの一員として製缶工場にいた。小樽合同労組が解散されて、小樽運輸者労働組合ができ、これもつぶされて全小樽労組が出来、伊藤はその書記をやった。その規約草案は、多喜二が作った。

昭和5(1930)年の12・1事件(全協事件)で、伊藤は投獄された。この

間、何度か東京へ行って、中野重治はじめ文学者たちと交友が始まった。12・1で起訴され、札幌市大通刑務所に入り、未決となったが、病気のこともあり、運動をやめると言って、いちおう執行猶予の形で、出所した。

彼が自宅に帰ったとき、小樽市富岡町で、母が「弘法の湯」という新興宗教に凝り固まって、それで生計を維持していた。伊藤は、町会で夜警などをやって生計の一助にしていた。文化運動では、直接運動に入らずに、資料や参考意見を援助の形で提供していた。

やがて結核が昂じ、昭和7年6月14日に自宅で死亡した。26歳であった。戒名は、真如靈光信士。母の妹・牧本タイ、異父妹・伊藤ヨシ子<sup>(28)(29)</sup>がいた。

## 7 上京。大月源二と中村善作

『戦旗』創刊号に蔵原惟人の「プロレタリア・リアリズムへの道」が発表された。多喜二はこれを読んで強い感銘を受け、5月、10日間の休暇をとって、5月13日ころ、小樽を立って東京に行った。用件は蔵原惟人に会うことだった。

蔵原は言う。「小林多喜二は1928年の5月におそらく銀行の用件で上京し、」と、しかし休暇をとってきたので、銀行の用件ではない。蔵原は続ける。多喜二は、「文学運動の同志たちを訪問して、私〔蔵原〕のところにもきた。私はそのときに、それまでのプロレタリア文学作品が、大きなスケールにおいて社会的なテーマをあつかってはず、またその中でそれぞれ違った性格をもつ生きた人間をえがいていないことを指摘し、これからのプロレタリア文学はそういう方向に向かってゆかなければならないという意味のことを小林に語った。」<sup>(29a)</sup>

東京には、庁商の同級生斉藤次郎がいた。彼は洋画の修行でこの年の2月下旬に上京していた。多喜二は中野区上町の斉藤の下宿にやっかいになった。同じく同級生の蒔田栄一が、高商をやめて、府立一中の英語教師をしたいた。『クラルテ』の同人だった平沢哲夫も東京にいた。多喜二は約1週間、東京に滞在した。芝公園一―二号地四番に住んでいた蔵原を訪ねた。彼は林房

雄や山田清三郎にもあった<sup>(30)</sup>。

5月のある日、東京で多喜二は大月源二を訪ねた。3・15事件の直後、プロ芸と前衛芸術家同盟とが合同し、全日本無産者芸術連盟（ナップ）が成立した。大月は、1927年に美校を卒業して、新宿淀橋の浄水場横の、洋館の2階に間借りした。この家が、プロ芸、のちにはナップの、合宿事務所になった。多喜二はこの事務所を訪ね、2階のベランダのある大月の部屋へあがってきた。その時こんな話をした。

「善作に会ったらね、『源ちゃん近ごろ東京で跳ねて歩いている』と言ったんで、おれ腹が立って、立って……」<sup>(31)</sup> 善作とは中村善作である。

多喜二は5月24日、小樽に帰った。そして「一九二八年三月十五日」を書き始める。それには大月がカットを描いている。その後「蟹工船」のカットも大月が描いた。なお大月源二は、「告別」——山本宣治の死、を書く。

中村善作は、風景画では小樽で最も有名な画家である。1901（明治34）年に小樽に生まれた。多喜二より2歳上である。父母は新潟から移住してきた。子供は9人で、彼は4男だった。4歳から絵に親しんだ。花園小学校に入学して、画に熱中する。そして堺小学校高等科を卒業後、小樽実業補修学校に1年通った。西谷海運に入社し、夜は必ず、小樽洋画研究所に学び、三浦鮮治、兼平英示、谷吉二郎、柘田誠一たちと知り合った。15歳であった。研究所といっても、粗末なものだった。研究所に通い始めて2年、神戸に転勤となって、絵画の道からは離れた。1922（大正11）年、病気で小樽に返された。そして再び洋画研究所に通い始めた。画家になるのは父が反対で、1924（大正13）年に家出同然で上京した。そして川端画学校へ通う。この年、小樽で初めての美術団体太地社が結成され、彼も会員になった。中村は、二科展にも入選し始めた。彼は小樽で風景をかき、1928年には結婚して小樽に住む。そこは若竹町であり、多喜二の家の近くであった。こうして多喜二と交遊した。彼の絵は、ほとんど小樽の風景であって、その一つ、「夏の北国風景」は、「スケッチブック回想」に「北国風景と多喜二」というタイトルで語られてい

る。当時、多喜二は『三・一五』を発表した直後で、大いに意気のあがる時期であった。「夏の北国風景」は、初めての百号大作で、これを最初に評価したのは多喜二だった。そして彼の発案で、画面右方に機関車を描いた「小樽風景」が、小樽図書館に寄贈されることになった。「小樽風景」の額縁を二人で作ったり、多喜二の妹が毎日パンを配達してくれた。多喜二は彼の困難な生活に救援の手をさしのべたので、「人情深い優しい男であった」と、中村は書く。

描きあがったばかりの「夏の北国風景」を見て、多喜二は中村に「善さん、一年一作という事で行こうや」と言ったが、この時、中村にはその意味がよく理解できなかつたらしい。「すくなくとも多喜二は自分の代表作として、という意味だったのでだろう」と、後に気づいた。「夏の北国風景」は、多喜二に誉められたが、おおかたの批評はかんばしくはなかった。中村は、多喜二の1年後、1931年にはまた東京に行くのであった<sup>(32)</sup>。

中村善作は、少なくとも1928年には、多喜二と親しく交遊した。1929(昭和4)年に上京し、1983年に亡くなった。

## 9 森良玄と

森良玄は、1907(明治40)年10月25日に、福島県で、農業・森長兵衛と妻・シウの6人兄弟の長男として生まれた。1917(大正6)年に、森一家は、北海道常呂郡野付牛村に小作人として入植した。良玄は、相内小学校4年に転入し、尋常科を出て、野付牛小学校高等科に進み、その後、庁立野付牛中学校に入学した。1927(昭和2)年に卒業して、森は、樺太に代用教員となって行った。樺太行きの船に乗るため、数日間、小樽に滞在した。この時、小樽では磯野小作人争議が行われていた。森は、合同労組の演説会を聞きに行った。興奮した森は、翌日も演説会に出かけた。森は、合同労組執行委員・坂本佐一郎を知り、樺太に渡った後、彼を通して合同労組と連絡をとった。やがて森は、知取(樺太の東海岸)の地方新聞社の記者になった。知取で森は、4歳年長の根室商業出身の島田清作<sup>(33)</sup>を知り、福本和夫の論文などを読



んだ。清作は、1926年6月、小樽の港湾ゼネストの応援にかけつけ、検束された。彼は、小樽合同労組幹部から労働組合の組織と争議の指導を受け、組合オルグとして樺太に渡っていたのだった。1926（大正15）年7月1日、小樽のゼネストは樺太にも波及し、木材積取人夫の争議が発生した。1927（昭和2）年夏、知取で原木労働者の争議がおこった。森良玄は、「資本家を糾弾する記事」を書き、争議は勝利した。彼は自ら自由労働者となり、1928（昭和3）年1月、島田清作とともに、知取町に樺太一般労働組合を結成し、書記長になり、評議会に加盟した。『赤旗』や『無産者新聞』が送られてきた。1928年4月、良玄と清作は、三・一五事件で逮捕され、その後、退去命令を受けた。4月末に福島に帰り、5月1日に郡山のメーデーに参加して検束された。6月に小樽に戻った。北海道の組織がメチャクチャになったからであった。森は合同労組再建のために奔走し、7月3日に小樽運輸労働組合が発足し、委員長に鈴木源重、書記に大西喜一、坂本佐一郎がなり、森は常任書記になった。組合員は、港湾労働者が主体で、約300であった。1928年8月、森は、オルグ杉本文雄から日本共産党入党決定を告げられた。彼は、8月から11月にかけて共産党再建と全協拡大のため、小樽以外にも帯広、釧路をオルグした。森が党組織を作った工場は、小樽では、基水堂（文字不明？）印刷、清水印刷、三馬ゴム、北海製缶などであった。

森が共産党に勧誘したのは、小樽では菊池直芳<sup>(34)</sup>、松本和三<sup>(35)</sup>、島田清作、風間六三、島田正策、札幌では深谷作治郎、帯広では曾根原博利、釧路では松沢徳蔵らであった。

1929（昭和4）年1月、評議会に代わって日本労働組合全国協議会が結成されると、小樽運輸労組はこれに加盟した。1929年、森は、四・一六事件で逮捕された。

多喜二は、森を主人公にした小説「工場細胞」を書いた。河田のモデルが森である。多喜二はこの原稿に「この一篇を『四一・六』の同志森良玄に」と献辞を書いている。

森は、1978年6月10日、札幌で死去した。

森が小林を初めて見たのは、1928年6月の下旬で、三・一五の弾圧から3月あまりたった。森、鈴木源重<sup>(36)</sup>、坂本佐一郎<sup>(37)</sup>と三人連れて、港湾労働者の溜り場<sup>(38)</sup>で演説しての帰り道であった。

色内大道の十字街を、小樽駅の方に向かって渡ろうとしていた3人に、大声で呼びかける青年がいた。

「鈴木さあん、源重さあん」

40メートルほど向こうからであった。もう既にうす暗くなりかけていたが、背広服をキチンと着た青年であることは分かった。特高でもなさそうだし、何者だろうと思ひながら、3人は立ち止まった。3人共うす汚れた労働服を着ている彼らに、夕暮れとはいひながら、小樽の間屋街の大道で、大声をあげて呼びかけるには、身ギレイすぎる青年であった。

「オウ、小林君か」

走るように近よって来た青年に、源重が呼び返したので、森は「アア、これが小林か」と、とっさに思った。小樽に来るとすぐ、森は小林の噂を聞いていたのだった。その年の2月の総選挙に、北海道の第1区から立候補した労働農民党の山本懸蔵<sup>(39)</sup>の応援演説をした銀行員がいると聞いて、大した勇敢な奴もいるもんだと、森は感心していた。その青年銀行員が小林で、小林のまわりには十数名のマルクス主義インテリ青年がいると報告されていたから、いずれ何かの役に立つだろう、その内マルクス主義の文献の講義を頼もうと、森は思っていた。その小林が、思いもかけず現れてくれたのだから、森の胸がおどった。

「いよいよ、はじめましたネ」

「うん、いい青年闘士が来てくれたし、ボツボツ組合のたて直しにかかろうと思ってね、番屋めぐりをして来たよ」

「みんな元気ですか」

「本当の元気はまだのようだが、まあ立ち上がってくれるだろうよ」

小林は、チラッと森の方にも視線を走らせたが、源重と向い合っていた。少し離れて立っていた森は、鋭く小林多喜二を観察していた。身体はやせ型

で小柄だが、野太い声にハリがあって、なかなかたのもし気であった。野太い声の中にうるおいが感ぜられるのは、心が暖かいからなのだろうと、森は思った。全体的にさわやかな感じであった。

「ナルホド、インテリ臭みのない奴だ。これなら選挙の演説や<sup>(40)</sup>ポスター書きくらいしただろう」

森は、小林に一目ぼれしたようだった。

源重が突然、森の方に振り返った。

「そうだ、紹介しておこう。小林君、これが青年闘士森君だ、中央の方針を持って来て応援に来てくれたようだ。こちらは小林君、小樽高商出のインテリだから、何でも教えてもらったらいよいよ。」

森は、源重の口から出た中央の方針うんぬんという一語に、一瞬ドキリとしたが、源重の紹介に反応した小林の態度に驚いてしまった。森の方に向きななおった小林は、両のカートを揃え、直立不動の姿勢になって丁重に頭を下げた。

「小林です。学校は出ましたが、何を勉強したんでもありません。いろいろご指導願います」

折り目正しい小林の挨拶に驚きあわてた森は、どんな返事をしたものやら覚えがなかった。ひたすら恐縮していた。小柄な小林にくらべると、森は背も十センチ以上高く、体重は30キロぐらい重かったと思えた。その大男の森が、小柄な小林の前で、子どものように小さくなっていた。

源重の口から出た「中央の方針でうんぬん」という一言に、何故森がドキリとしたかという、当時中央の方針という言葉は、日本共産党の方針を意味する言葉であった。だから、特定の個人を指して中央の方針で動いていると言うことは、彼は共産党員ですよということであった。小林は源重の一言をその様にうけとり、森が共産党中央から派遣された党員だと誤解した。そしてテキキ共産党のオルグだと思って緊張した。これは翌年、お互いにそうだったと分かった。そして森はこの時、共産党員ではなかった。

小林と森を一瞬極度に緊張させただけでその場は別れたが、源重が不用意

に口から出したような言葉は、当時階級闘争にたずさわる活動家は、かるがるしく口にしてはならぬことになっていた。共産党員ですと、指名するに等しい言い方は、獲物を狙っている特高警察に検挙の手がかりを与えることになる。スパイ行為、挑発活動と断ぜられる言動である。その時、源重がそんなことを言ったのは、合法主義者の源重がうっかりしゃべったというだけではなく、もっと根の深いものであったようにも、森は考えている<sup>(41)</sup>。

### 補遺 小樽と映画<sup>(42)</sup>

明治29年(1896年)、エジソンの発明した写真活動機が神戸で輸入され、函館まで来た。別の「電機作用活動大写真」が同年7月に函館にきて、8月に小樽に来た。小樽では末広座、住吉座で上映された。明治31年(1898年)、エジソンの活動大写真が来た。小樽でも上映された。末広座(同8月焼失)に2千人集まった。弁士は駒田好洋であった。

明治32年(1899年)、小樽の鈴木政五郎は、活動写真の技術を東京で習って、映写機とフィルムを買って、互楽亭で知人に写して見せた。

そのころ、小樽に、末広座、手宮座、住吉座、互楽亭、旭亭、福寿亭などの小屋があった。その末広座は、明治31年の焼失後、住吉座が買収されて、末広座跡に住吉座が建てられた。

明治32年に2度活動写真が小樽へ来た。住吉座へであった。明治35年、36年に、活動写真が北海道に、明治38年(1905年)には小樽に、住吉座へ来た。明治38年、『ナポレオン一代記』が小樽・住吉座で上映された。長編映画の最初であった。

明治45年(1912年)には、北海道紹介の映画が作られ、小樽の風景もそこに入った。大正元年(1912年)、日本活動写真株式会社ができる。大正2年(1913年)に、小樽では、公園館、神田館が、常設館としてあった。そして小樽に弁士が生まれた。大正3年(1914年)に電気館が小樽にできた。大正4年(1915年)にヨーロッパ物の『プロテア』が小樽で、大正5年(1916年)に富士館で『黒い箱』が上映された。大正5年に男女席が区別された。チャッ

プリンの『パン屋と爆弾』が入ってきた。ニコニコ館=第2電気館が大正5(1916年)に小樽にできた。

大正6年(1917年)には、札幌で学童の常設館観覧が絶対禁止された。洋もので、『啞娘』が小樽の錦座でも上映され、浅草の有名な弁士・熊谷暁風が小樽錦座入りした。アメリカのユニヴァーサル会社が小林商店と合同し、小樽では小樽錦座、電気館が契約をした。大正6年にチャップリンの『失恋』『駈落』がきた。このころ活動写真の検閲が強化された。大正6年で、北海道で145件が禁止され、小樽では17件であった。大体、文部省は映画を嫌っていた。

大正7年(1918年)に『レ・ミゼラブル』が小樽で上映された。大正9年(1920年)ころには、新聞記事では活動写真といい、広告では映画といい、愛好家はキネマ、シネマと呼んでいた。若松館が大正9(1920)年に小樽にできた。

大正10年(1921年)に小樽の映画上映は1215回で、これまで興行物はすべて函館で始まり、小樽へきて、札幌へ行った。しかしこのころから札幌が小樽より上映が早くなった。大正11年(1922年)、天才女優とされたリリアン・ギッシュ<sup>(43)</sup>や、リチャード・バーセルメスの『東への道』『散りゆく花』がきた。この『東への道』は一等席が3円だった。

以下、北海道的レベルで語る。

日本女優では栗島すみ子が登場した。説明者(=弁士)土屋松壽{サンズイをつける}が『不如帰』『金色夜叉』などをもってきた。大正12年(1923年)、ダグラス・フェアバンクスの『三銃士』、ヴァレンチノものが来た。メリー・カーの『オーバ・ゼ・ヒル』、リリアン・ギッシュとドロシー・ギッシュ姉妹の『嵐の孤児』が来た。日本ものでは、『船頭小唄』。このころはまだ、説明者のほうがスターだった。大正13年(1924年)、外国ものでは、再びダグラス・フェアバンクスの『ロビン・フッド』、ヴァレンチノの『血と砂』、日本では、尾上松之助が大活躍していた。大和館が大正末に小樽にできた。

大正15年=昭和元年(1926年)、沢田正二郎が13年ぶりで来た。彼の映画

は『月形半兵太』、それ以外に阪妻や、尾上松之助の映画が来た。沢正は新国劇の大物であった。洋画では、『ジークフリード』、チャップリンの『黄金狂時代』、ダグラスの『海賊』などが来た。昭和2年は経済恐慌の年であった。東亜キネマが北海道支社をおいた。阪妻が活躍し、松竹の林長二郎（後の長谷川一夫）、マキノの片岡千恵蔵、日活の大河内伝次郎が登場した。昭和3年（1928年）にチャップリンの『サーカス』が来た。映画ではないが、築地小劇場が、『叔父ワーニャ』、『三和尚』をもって、夏の北海道に来了。山本安英、汐見洋、丸山定夫、東山千栄子、細川知歌子、岸輝子らであった。

1928（昭和3）年8月7日に、八千代館が603 m<sup>2</sup>を焼失した。

昭和4年（1929年）に、トーキーが入って来た。説明者=弁士に、俳優の人氣が迫ってきた。6月、岡田嘉子が新しい愛人竹内良一と、劇団を組織して来た。映画では剣戟物につづいて、傾向映画の剣戟ものが入った。『砂漠に陽が落ちて』『波浮の港』『君恋し』『紅屋の娘』が入った。

### 軍教事件3稿への補遺・訂正

かつての小生の3つの稿、「小樽高商軍教事件（上）」（『商学討究』第47巻第2・3合併号 1997年1月）、「同（下）」（同、第47巻第4号 1997年3月）、「……補遺 小樽高商軍教事件 続」（同、第49巻第2・3合併号 1998年12月）にたいして、石井和佳氏から次の指摘と教えが寄せられた。

補遺54ページ 15行 拙稿中のIIIはviii

上41ページ 25行 震災時の龍現 再現

上52ページ 6行から「この事件で学校を追放となり、東京の巣鴨高商時代に亡くなられた高松教授」と、毎日新聞から引用してある。しかし、補遺54ページ 7～8行で、「高松が大倉高商にいたと、高橋=石田は書くので、高松は巣鴨高商から大倉高商へ移ったのであろう。」とある。

このため、矛盾している、というもの。だから小生には、高松が大倉高商へ行ってから亡くなったものと考えられる。今はそれだけとし、今後、機会があれば、調べるつもりである。

補遺 52 ページ 21 行から、石田＝高橋教授の経歴について、触れてある。しかし、石井氏の提供資料によれば、石田＝高橋教授は、滋賀大学から大阪大学に移り、そこで定年退官し、その後、京都産業大学に勤められた。

以上は、石井和佳氏のご指摘によった。有難いことである。

### 多喜二しのぶ新住居跡碑

北海道新聞で上記の題で、次の記事が出た。

小林多喜二の新しい住居跡碑が、1999年2月17日、JR小樽築港駅の駅南広場に設置された。1898年に現在地より約20メートル離れた国道5号沿いに立てられた従来の木製の碑とは異なり、新しい碑は石造りの支柱に鋳鉄製の銘板を取り付けた恒久的な碑になった。築港ヤード跡地再開発で同広場が新設されるなど周辺整備が進んだため、小樽市が約80万円をかけて碑を新しくした。銘板には多喜二と彼の住んだ家とのかかわりが記されている。

また、小樽小樽開建委託の除雪業者が歩道除雪中に破損させた従来の木製の碑は、現在同開建が修復中で、終わり次第、市立小樽文学館に移して保存される予定<sup>(44)</sup>。

さて、その銘板の文はこうである。まず上部に横書きで：

「小林多喜二

(1903－1933)

住居跡

(旧若竹町十八番地)」

次いで縦書きで、こう記されている。

「明治末期、秋田から移住した小林多喜二の一家は、鉄道線路を背に、小さなパン屋を営んでいた。

当時、家の裏手は築港の工事現場で、タコ

と呼ばれた土工夫が過酷な労働にあえぎ、非人間的なタコ部屋に押しこまれていた。その実態は多喜二の心に深く焼きつけられ、後年「人を殺す犬」「監獄部屋」などの作品を生んだ。秀作「同志田口の感傷」の姉弟が鯨漁で湧きたつ熊碓浜（現東小樽）へ行くのもこの家からである。

緑町の小樽高商（現小樽商科大学）へは、四キロの坂道を歩いて通った。勤め先の北海道拓殖銀行小樽支店へは、築港駅から旧手宮線色内駅まで汽車で通勤した。」

- (1) 山野千衛「小林多喜二を回顧する（二）」（『小林多喜二の肖像 2』小樽文学館 平成11年）11-12 ページ。
- (2) 同，11 ページ。
- (3) 曾根博義『評伝 伊藤整』六興出版。
- (4) 『大塚金之助著作集』全10巻，岩波書店，あり。
- (5) 『大塚金之助論』成文社。
- (6) 『伊藤整全集』第23巻，221 ページ。
- (7) 「小林多喜二を回顧する（二）」10-11 ページ。
- (8) 同，12-13 ページ。
- (9) 中野，1902-79。
- (10) 藤森，1892-1977。
- (11) 青野，1890-1961。
- (12) 林，1903-75。
- (13) 村山，1901-77。
- (14) 葉山，1894-1945。
- (15) 山田，1896-1987。



- (16) くらはら これひと, 1902-91。
- (17) まえだこう ひろいちろう, 1888-1957。
- (18) かねこ ようぶん, 1894-1985。
- (19) 黒島, 1898-1943。
- (20) 平林, 1905-72。
- (21) 風間の稿, 『北方文芸』 7。
- (22) 参考, 篠原昌彦『小林多喜二『東俱知安行』における倫理的主体性について』(『苫小牧駒沢大学紀要』18号, 昭和61年3月)。
- (23) 小生のインタビュー。
- (24) 『全集』第2巻, 20ページ。
- (25) 琴坂『ガイドブック 小林多喜二と小樽』新日本出版 1994年 35ページ。
- (26) 琴坂, 口頭。
- (27) 『北方文芸』1968年3月, 100-101ページ。
- (28) 『北方文芸』11。
- (29) 作品として, 連続エッセイが, 『小樽魁新聞』にあり, 手紙が『中野重治全集』第17巻405～6ページに, 「死」が『赤え』に, 「反戦小説について」が『戦旗』昭4年10月, 第2巻10号に, 「北海道通信」が『ナップ』昭和6年11月, 第2巻11号にある。下3つは, 『北方文芸』に再録。
- (29a) 蔵原惟人『『一九二八年三月一五日』と『蟹工船』について』(『小林多喜二と宮本百合子』大月書店1975年) 34ページ。
- (30) 手塚英孝『小林多喜二』上。
- (31) 大月「多喜二と私」(『北方文芸』1968年3月) 87ページ。
- (32) 鈴木正實『中村善作』北海道新聞社 平成2年。
- (33) 島田。嶋田正策とは別人である。
- (34) 菊池, 不明。
- (35) 松本和三, 1906年生まれ, 静岡出身, 全日本無産者青年同盟小樽支部員 3・15に連座, 4・16に連座。

- (36) 鈴木源重, 1891年生まれ, 1871年死。山形生まれ。夕張鉱山で労働運動。小樽合同労組執行委員長。3・15事件に連座。戦後, 道議会で活躍。特要甲号共産主義とされる。戦後3代目の道議会副議長になった。
- (37) 坂本佐一郎, 1894年生まれ, 小樽出身, 日雇, 労農党小樽支部長, 3・15に連座, 小樽総労働組合の中心で, 委員長。
- (38) 番屋であろう。
- (39) 山本, (1895-1942)。第1回普通選挙で, 北海道から立候補。共産党员。
- (40) 『文芸北見』1980年12月号 第22号, 森良玄の遺稿 — 小林多喜二との思い出 —, 276ページ。
- (41) 『文芸北見』277ページ。
- (42) この項は, 菅谷英孝先生の調べ, そして, 更科源蔵『北海道活動写真小史』九島興行株式会社 1960年, を利用する。
- (43) 『リリアン・ギッシュ自伝』筑摩書房 平成2年。
- (44) 『北海道新聞』 1999年2月18日朝刊 から。